



「忠臣蔵三百年」48番目の義士 菅野三平重實 ⑫

「結び」にかえて (2)

前号で菅野三平と武芸との関連について紹介しましたが、今回はその続きです。菅野家が箕面から遠く離れた美濃国の旗本「大嶋家」に仕えるようになったのは、慶長5（1600）年に起きたある出来事がきっかけでした。

菅野家は、天正7（1579）年に豪族・荒木村重の伊丹城落城により領地を失いましたが、その後、三平の曾祖父にあたる「菅野恒産」は摂津国岸辺（吹田市岸辺）の代官になりました。恒産が、慶長5年に摂津国廣芝（吹田市広芝町）で、九州・薩摩の島津家家臣と闘争し、2人を討ち取るという事件が起きました。そして、事件後に恒産は、美濃に逃れ大嶋家の「客分」となっています。この年は関ヶ原

の合戦が行われた年で、西軍（石田方）である島津家の兵を討ち取った恒産を、東軍（徳川方）の大嶋家が迎え入れたと考えられます。この事件がきっかけとなって、菅野家と大嶋家の主従関係が始まった訳です。

一方、三平の死後およそ100年以上もたった19世紀初期に、兵学者「菅野春陽」が登場しました。兵学・砲学・馬術・馬弓術などを教える春陽のもとには、石高1万石で豊中・蛍ヶ池に陣屋（屋敷）を持つ大名の麻田藩の家老など、多くの藩士が入門しました。また、春陽の本名は「菅野七平延重」といい、三平の兄重通の曾孫にあたりますが、このころには、旗本大嶋家と菅野家の主従関係はなくなっていました。

ここまで、三平及び菅野家に関する武芸について述べましたが、みなさんの持っている三平のイメージに、変化はありますか。



たでしょうか。今回でこのシリーズの最終回とさせていただきますが、300年の歴史は、多くの出来事を忘れさせるとともに事実の一部を歪曲して伝えていきますので、ある程度の推測を交えながら「菅野三平重實」の一面しか掘り下げる事ができません。しかし、多くの謎があつたほうが歴史というのは、おもしろいものですので、三平という人物に、ぜひとも興味を持っていただければと思います。たとえば、「四十七士」ではなくとも、三平が赤穂事件で果たした役割の大きさ、死に臨んでの潔さ、あとに残された悲しみは、四十八番目の義士として讃えられて当然であるはずですが。また、俳人「菅野涓泉」として残した業績は、郷土が誇る文化人として讃えられるものと思います。

27年の短いけれども波乱万丈の人生に、三平が自ら幕を降ろした元禄15（1702）年1月15日から、あと2年足らずで300年になりますが、市内には、菅野三平の生誕・終焉の地である旧邸跡と長屋門が今日まで伝え残され、記念館「涓泉亭」が建てられています。みなさんのお手元に、この記事が届く4月初旬、旧邸跡の桜も、ちらほら咲いていることでしょうか。

晴れゆくや 且しろ心の花雪り